

---

# 地下室ないのに地下室の鍵もらった

MW

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

地下室ないのに地下室の鍵もらった

### 【Nコード】

N6613V

### 【作者名】

MW

### 【あらすじ】

先輩に「幽霊女」と呼ばれている人がいる。  
話したことの無いその先輩から、俺の家の『地下室の鍵』をもらった。

俺の家に地下室は無い。

そしてこの鍵は、決して使ってはいけならしい ……。

**開幕（私の見解）（前書き）**

この物語はフィクションです（念のため）。

## 開幕（私の見解）

1 名前：本当にあつた怖い名無し 2012/08/13（土）

10:21:43 ID:SlainKL

先月の中旬頃、俺は見ず知らずの先輩から鍵をもらった。

その鍵は俺の家の地下室の鍵らしい。

ただ、俺が住んでいるのはボロアパートで地下室なんてものはない。  
俺は地下室を探すことにした。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

夏休みのある日、私はこんな内容で始まるスレを見つけました。

スレ主の言っていることが本当かどうかは分かりませんが、すでにネット樹海のかなたに消えたそれを、1人でも多く知ってもらいたくてまとめてみようと思います。

## その男と先輩の出会い

俺がその人に出会ったのは、大学の補習が終わって中庭でボーッとタバコを吸ってる時だった。

真夏の太陽の日差しがサンサンと降り注ぐ底は、この時期は休憩するのに不向きな場所で、誰も近寄ろうとしない。

日本人形に良く似た美人。

学部内でも有名な「幽霊女」だ。

彼女はオカルトだとかそういうのに興味があるらしく、旧校舎に入っては幽霊と会話しているだとか、高校の時に援助交際で稼いだ金で水晶を買ったとか……まあ、とにかく良くない噂のある女だった。

「あなた、幽霊丸見え眼鏡ってご存知？」

「は？」

「知らないなら良いわ。本題はそっちじゃないから」

そう言つと女はウオード錠のアンティークな鍵を取り出す。それを差し出してこう言った。

「これ、貴方の家にある地下室の鍵よ」

俺の家にウオード錠は付いていない。

そう言つて受け取るのを拒んだら、女は無理やりポケットに手を突っ込んできた。

「持って行きなさいって。本当に貴方のだから。でも使つては駄目よ」

女はニヤリと笑って去って行く。  
その後姿を眺めていると、ポンと肩を叩かれた。

「よお、佐伯。こんなところで何やってんだよ」  
「あ、ああ……いや、幽霊女が」

そう言って振り向いた先には、誰もいなかった。

「幽霊女？ お前、あいつと喋ったのか？ 呪われるぞ」  
「何がキミみたいなこと言ってるんだよ」

この男は同じ授業を取っている前島。  
入学したときから妙にウマが合い、一緒にいることが多くなった。

「で、何の話してたんだよ」  
「何って。これもらってさ」

そう言って鍵を見せれば、片眉をピクリと上げていやらしい笑いを浮かべる。

「おいおい、私の家に来たってか？」  
「なわけあるか。よく見ろ」

放り投げて渡した鍵を見て、前島は酷く残念そうな顔をした。

「なんだゴミか」  
「俺ん家の地下室の鍵らしい」  
「何でお前の家の鍵を幽霊女が持っているんだよ」

「それが、その鍵に覚えがないのに貰ったんだ。俺の家の地下室の鍵らしい」

俺があの家引っ越したのは先月。  
家は小汚いアパートで、地下室なんてあるはずもない。  
それはこの前島もよく知っている。

「へえ……なんか気味悪いな」

確かに気味が悪い。

幽霊女は「貴方の家にある地下室」と断言した。

誰かと間違えているとしても「使ってはいけない」とはどういうことだろうか。

そしてそれを聞く前に、こんな開けた大学の中庭で、俺はあの幽霊女を見失った。

「まあ、いいや。今日、お前ン家行っていいか？ 探そうぜ。地下室」

そんなものがあるわけないのは分かっている。

ただ、飲みたい口実だろう。

でも、この時期だし、そんな怪談めいた集まりの口実があってもいい気がする。

「しょうがねえな」

「よし！ じゃあ、酒持って集合な！」

こうして、前島と俺は補習が終わったら俺の家で飲み会をすることにした。

## 地下室探し

「ねえじゃねえか地下室！」

「別に探しにきたわけじゃないだろ」

呆れたように言えば、ゲラゲラ笑う酔っ払い。

こいつは酒が弱いくせにガバガバ飲むから性質が悪い。

「ないよーな気はしてたんだけどよー」

一応、学校から帰ってしばらく地下室を探した。

大家にも聞いてみたし、畳もひっくり返してみた。

台所の床下に開いている収納の中も調べたけど、何も無いのだ。

(ま、冗談だったんだ)

元々信じてはいなかったものの、何故自分が話しかけられたのかを考えると、妙にモヤツとした引っ掛かりがある。

心のどこかで面白い事態に巻き込まれたことを喜んでいたため、肩透かしを食らってガツカリしているのだ。

つまり、まんまとあの幽霊女の冗談に乗せられたと。そういうことだ。

「……寝てるし」

静かになった連れを見たら、いびきをかいている。

タオルケットでもかけてやるかと押入れを開けたときだった。

「ん？」



目の端に真つ赤な何かが映る。

ふとそつちを見れば、見たこともない扉があった。

「ッ!？」

その扉は血のように赤く、気づかないはずは無いほどの存在感。

壁しかないと思いついていた場所。その扉についている取っ手が、鈍く金色の光を放っている。

鍵穴は、ウオード錠独特のものだった。

「……前島? おい、前島」

扉に視線を奪われたまま呼ぶものの、前島は起きる気配が無い。

意を決して扉に近づき、鍵を取り出すと差し入れた。

「……」

鍵穴にぴつたり収まる。

その時、幽霊女の言葉が浮かぶ。

「ごくりと生唾を飲み込み、俺は鍵を回した。」

カチリ

扉が開錠される。

開けるなど言われていた扉は、あっさり開いてしまった。

震える手でドアノブをつかみ、ゆっくりひねる。

ギィ……といかにもな音を立てて扉はゆっくり開く。

扉の向こうから、カビ臭い臭いが漂ってきた。  
扉を開けてすぐ、下に伸びるコンクリ打ちっばなしの階段。  
途中にポツリ、ポツリと裸電球が吊るされていて、風も無いのに  
ユラユラとゆれている。

「……誰か……いますか？」

小さな声は、コンクリートに吸い込まれて消えた。  
その時、階段の下の方に誰かがいるのに気づいた。

「なんつ……で……」

なぜ、こんなところに人がいるのだろうか。

ここは俺の家だ。

もしかしたら、外につながっているのかもしれない。

それで、ここは大家さんの納屋で、各人の家につながっているの  
だ。

そう、恐らく避難経路として ……。

「!!」

俺は気づいてしまった。

奥にいるのが何なのか。

女だ。髪を振り乱した女が、作業台のようなところで何かをして  
いる。

一心不乱に何かを……例えばうどんの生地を伸ばしているかのよ  
うな動作をしている。

ひたすら、ガリツガリツと音を立てながら。

「……」

それは異様な光景だった。

裸電球が作業台と女を照らす。

しかし、作業台は女の影になっていて、何がおいてあるのか見えない。

ただ、床に1つの壺が置いてあるだけだ。

女はこちらに気づかない。

「……」

俺は、気味が悪くなってそつと扉を閉めた。

鍵をかけて深く息を吐く。

あの扉は、本当に開けてはいけなかったのかもかもしれない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6613v/>

---

地下室ないのに地下室の鍵もらった

2011年8月24日11時42分発行